

塩狩峠

三浦光世 筆

塩狩記念館
友の会会報第14号
平成18年11月発行

平成十八年度総会終了

六月二十日午後六時半より、塩狩峠記念館で友の会会員十名が参加して総会が行なわれました。

十七年度事業報告及び決算報告、並びに会計監査報告が承認され、引き続き十八年度事業計画及び予算案の説明があり、文学館で行なわれる講演会の参加 和寒町での講演会の開催などの提案があり、予算と合わせて承認されました。

また、十八年度は役員改選の年であり新役員が決まりましたので報告させていただきます。

共同代表	渋谷 澄夫
共同代表	真鍋 紘一
共同代表	宮崎 恒子
監事	須貝 博夫
監事	裊田 道悟

今後もみなさんと協力して友の会を盛り上げていきましょう！



記念館周辺草刈作業

六月二十三日午前五時半より塩狩峠記念館周辺草刈作業を実施しました。多くの会員の方の参加もあり、ブラシカッターを上手に使いこなし、一生懸命枝を拾ったりと作業はとてもスムーズに進みました。

森下辰衛氏ミニ講演会

八月十八日旭川市三浦綾子記念文学館において、三浦文学研究のために文学館に一年間来られている福岡女学院大学助教授である森下辰衛氏のミニ講演会に参加してきました。小説「塩狩峠」の作品解説を中心にした講演内容で出席した会員の方達は熱心に話を聞いていました。



また、旭川在住の会員の方の出席もあり、多くの会員の方の出席がありました。

三浦光世さん講演会

七月十五日に旭川三浦綾子読書会の主催の事業の中で三浦光世さんが塩狩峠記念館で講演をしてくれました。友の会としての参加者は少なかつたのですが、綾子さんと出会った時の話や昔の思い出話をしてくれました。



渋谷澄夫さん講演会のお知らせ

12月に和寒町立図書館にて、友の会会員であります、渋谷澄夫さんの講演会を開催致しますので、多くの方のご参加をお待ちしています。

日時 12月中に開催する予定ですが、詳細については後日防災無線等でご連絡致します。

場所 和寒町立図書館 視聴覚室(予定)

テーマ 三浦綾子著「銃口」とその時代背景

その他 図書館内には会員であります宮崎恒子さんの写真も展示する予定です。

文学館イベント情報

旭川三浦綾子記念文学館の今後の行事予定を掲載致しますので、興味のある方は是非足をお運び下さい。

三浦綾子色紙展

十二月十二日～二十六日

三浦光世氏「小さな講演会」

十二月十三日 午前十一時
午後二時の2回

森下辰衛氏ミニ講演会

十二月十五日 午後二時

来館者の声

記念館ノートから

塩狩峠記念館に設置している《来館者ノート》には多くの方から感想が寄せられています。今回はその中からほんの一部ですが、5月～8月に記載された分をご紹介します。

2006.5.2

北海道に住んで3年、今年4月で結婚25年目を迎えました。三浦綾子ファンの夫と初めてこの塩狩峠を訪れました。深い信仰に裏打ちされた静かながら力強い愛情を感じました。

私もまだ読んでいない作品を読んでみたくなりました。“岩に立つ”を読んでみたいです。

結婚記念のいい思い出になりました。

(北見市 Y)

2006.6.25(木)

子供の頃、映画“塩狩峠”を見ました。その頃はまだ三浦綾子先生の名前は存じていませんでしたが、映画の中で峠で制動不能となった列車を止める場面がずっと記憶に残っていました。その後三浦先生の作品を読み、いつか“塩狩峠”を訪れたいと思い、今日やっと訪れる事が出来ました。時が止まった様な場所に時折走り過ぎる列車の姿が現実を思い起こさせてくれます。いつまでもこの記念館がここにあり続けるように願っております。

(横須賀市 S)

2006.6.2

旭川から列車にて当記念館に立ち寄りしました。三浦さんの作品は氷点・続氷点・塩狩峠・泥流地帯・天北原野と立て続けに読破しましたが、作者は主人公に次々と試練を与えてハッピーエンドにならないので、なんて厳しい人なんだろうと思っていました。この記念館がいつまでも末永く我々に身近にあるように願っています。

(千葉県 K)

2006.8.20(月)

自転車で北海道1周をしていて、その途中で立ち寄りしました。幼い頃から本が好きで、三浦綾子さんの著書にも深い感銘を受けました。読んだ後にじっと考えさせられる作家の方はそう多くないかもしれませんが、三浦さんはまぎれもなく読後に優しく、そして厳しく、背筋を伸ばされるような感じを受ける、素晴らしい作家であると思います。自分も自己に厳しく、他者に優しく接する生き方を成せるように努力します。

(神戸大学 Y)

11月30日閉館

4月1日より開館していました塩狩峠記念館は11月30日をもって今年度は閉館とさせていただきます。来年度以降も引き続き入場者へのサービスや交流事業を充実させて、ひとりでも多くの方々にご来館いただける様に努力したいと思いますのでよろしくお願い致します。

友の会レターク 峠の呟き

「SLの雄姿と

ロマンの影の凄惨な歴史」

「シユツ、シユツ、ポツ、ポツ」峠を登る時のSLの廃気音ドラフトである。「ポー」と言う汽笛と共に吐き出すドラフトはSLファンの胸を躍らせたものである。国鉄宗谷線も昭和三十一年頃からディーゼルカーに変わり始め、やがてやがてSLの全てが姿を消すことになり、その雄姿は恵のホールの庭園に我町唯一の蒸気機関車として静かに佇み、往事を忍ばせてくれております。私が「小説塩狩峠」と出会ったのは交通事故で町立病院に入院している時であります。三十八年程前になります。小説の主人公である長野政雄さんが名寄からの帰りに、乗車していた列車の最後尾が外れ塩狩峠を逆送し、このままだと転覆脱線により多くの人命が危ぶまれた時、自らの身を投じて悲惨な事故を未然に防いだこの尊い行為は最後の章の圧巻であり感動ものでした。人を救う、助ける行為はキリスト教のみならず仏教その他の宗教の教えの中に数多くありますが、小説での救世主は普通のクリスチャンであり、その舞台が我町塩狩峠で起きた現実が心をつき動かしました。私の住む東町は宗谷本線の傍らにあり汽車の音は常に耳に入り、走り行く姿は毎日時刻ごとに何本も目にしておりました。小学生の頃の出来事には、塩狩峠を登る事が出来ず戻ってきた貨物列車や、峠を下る途中の列車に撥ねられ和寒駅構内手前迄、数キロも引きずられ農耕馬、十六線の踏み切りで撥ねられた方を目撃しています。怖いもの見たさに現場に走りましたが、その時の凄惨な姿をここで表す事は出来ません。それから数人の人々がこの線路上で命を失っておりませんが、一切目に止めた事はありません。乗客を危機から救い、殉職された長野政雄さんの最後はどのように葬られ、天国に召されたのでしょうか。